

2018 年 1 月 13 日 (土)

富山県民会館 611 号室

14:00~15:30

「日本海地域における日本人の歴史—小竹貝塚出土人骨を中心として—」

国立科学博物館 研究主幹

坂上 和弘 氏

1. 骨は口ほどに物を言い

私が専門としている自然人類学は生物学として人類を考える学問である。例えば 370 万年前のアフリカのラエトリ化石は、初期人類が火山灰の上を立って歩いた痕跡であり、私たちが一目見て「ヒトの足跡」と理解できるほど特徴的である。1969 年 7 月にアームストロング船長が月面に残した足跡も「ヒトの足跡」であり、両者に根本的な違いはさほど見られない。ただ、前者はアフリカ、後者は月面で靴を履いている、という違いがあり、その違いをもたらしたものが、「道具」といえる。こういったヒト特有の体、ここでは足跡、などを研究・分析するのが自然人類学である。



自然人類学はヒトの体を研究対象にする学問だが、特に骨を研究対象にすることが多い。骨を対象にする利点は、第 1 が人骨は残りやすいこと、第 2 は性別を明らかにできること、第 3 は年齢も推定できること、第 4 に骨は体がどう使われたかも語ること、第 5 としては、骨からその人がかかった病気を推測できる場合もある。例えば三貫寺貝塚という縄文時代の遺跡から出土した骨には、頭骨に転移した癌を示す事例も報告されている。さらに、骨はその時代の文化を語ることもある。中国で長く行われていた纏足（てんそく）をしていた人の足の骨は特殊な変形が見られるが、現代人の女性の足の骨にも強度の外反母趾による変形が見られる場合がある。もしある人の足の骨に、「纏足変形」が認められるとその人は「纏足文化」に所属し、「外反母趾変形」が認められるとその人は「外反母趾文化」に所属している、と判断することができる。

このように、人骨はその持ち主が生前どのような人だったのか、を教えてくれる証拠であり、文字通り「骨は語る」のである。

2. 縄文時代の人骨の特徴（小竹貝塚出土人骨を中心に）

日本列島は人骨標本が豊富で、継続的な時代変化を追うことができる世界でもまれな地域である。時代順にその特徴を追っていこう。

縄文時代の人骨はおよそ 4000 体程度発見されているが、顔の彫りが深く、顔の上下が短いなど、独特の風貌をしていた。また、顎ががっしりとして、歯が小さく、歯のすり減りが非常に強かった。

また、抜歯風習があり、生きていた間に歯をわざと抜いていたことも知られている。これらは出身や階級を表しているという仮説もある。太ももや腕の骨といった四肢骨は、縄

縄文時代人とそれ以降の時代では違ってくる。縄文時代人は肘から先、膝から先が長く、筋肉が付くところが非常に発達している。特に大腿骨の裏側に骨の突起が著しく、断面を見ると卓球のラケットのような形状になっている。さらに、蹲踞（そんきょ）姿勢を習慣的に取っていたと考えられる。

また、縄文時代には戦闘はあっても戦争は無かったのではないかとされている。上黒岩遺跡では骨盤に骨器の槍の先が刺さった状態の人骨が見つかったが、これはまれなケースで、宮野貝塚出土人骨の例のように、矢じりがささった状態で治癒している例が報告されている。また、鈍器で殴られた痕跡のある人骨でも治癒しているケースも報告されている。つまり、縄文時代は外傷を受けても治る、殺す目的で傷を負わせたのではない可能性が示唆されている。さらに言えば、同じ遺跡で外傷がある個体が多く見つかる事例はほとんどない。

同じ縄文時代人でも時代差が指摘されている。縄文早期は顎がほっそりして顔が逆三角形なのだが、前期になると非常にバラエティに富んでくる。縄文時代早・前期人は発見事例が少なく、個体数が少なかったが、ほぼ倍増させたのが富山県富山市の呉羽丘陵の小竹貝塚である。小竹貝塚では 1970 年以降 100 体近くの個体数が発見され、他に例を見ない規模で縄文時代前期人が発見されている。

小竹貝塚から出土した考古遺物の特徴としては、全部で 13t 近くになるいろいろな土器が見つかっており、関西、関東、東北の各地域からいろいろな土器が入っている可能性が指摘されていることや、九州や伊豆諸島以南でしか生息しない貝の製品が出土していることから、非常に広範囲の交易もしくは交流があったことが推測されている。

小竹貝塚出土人骨には、幾つの特徴が認められる。例えば明らかな個体埋葬もあれば、同じ場所に 2 人分埋葬されている事例がある。また、集団としては、出産間近な個体など成年期の個体が多くて、男性が女性よりも多いという傾向が明らかになっている。縄文時代の男性の平均身長は 158cm、女性は 148cm なのに対し、小竹貝塚出土人骨には当時としてはかなりの高身長である 170cm に達する個体が複数存在するが、逆に小柄な個体も多く、平均身長は 162cm となっている。

小竹貝塚出土で顔つきが分かるぐらいに残っているのは 6 個体だが、その形態は非常にバラエティに富んでおり、前から見ると三角形の少し細い傾向のある個体もあれば、逆に細くない個体もある。頭蓋冠のカーブが非常に強度な個体もあれば、そうでない個体もある。顎が前に突出している個体もあれば、そうでない個体もある。日本各地の早期・前期の個体と似た個体も多く、結果として、一つの遺跡で様々な地方の早期・前期人に似た頭骨が見つかった。これは考古遺物が示す、広範囲の交易・交流とリンクしているような印象をうける。



図 小竹貝塚人

また、ミトコンドリアの DNA 分析でも、N9b、M7、M7a、M9a、A、G と様々な地域の遺伝子型が見られることから、小竹貝塚は当時の日本の遺跡の中でも人々の交流があった可能性が示唆されている。そして、単に人が行き過ぎる交流ではなく、人がそこで埋葬されるぐらいの関係性があった可能性が指摘されるという意味で、非常に重要で興味深い遺跡と言える。

3. 弥生時代人骨の特徴

日本海沿岸に弥生時代人骨は数多く発見されている。弥生時代人の顔貌は縄文時代人とは大きく異なり、顔が大きく平坦な顔つきで、歯が大きいという特徴が指摘されている。また、弥生時代人の平均身長は、縄文よりも急激に大きくなっているが、これは体格が違う弥生人が大陸から日本列島に入ってきたためと理解される。弥生時代人の頭骨には地域差があるという指摘があり、同じ弥生時代でも北九州、東九州、西九州、南九州、山口地方で顔つきが大変違うと言われている。

縄文時代人と弥生時代人と違いは古くから自然人類学者の興味を引いており、弥生時代に大陸から日本へ入ってきた人間が日本列島に広がっていく過程で、もともといた縄文時代系の人たちと混血する、ないしは抗争によって追い出すということを繰り返し、今の日本人を形成したという日本人二重構造論が提唱されている。

人骨を伴う弥生時代の遺跡は日本海側に多く存在するが、その中でもユニークなのは、鳥取市にある青谷上寺地遺跡である。これは 1998 年、道路の拡張の際に発掘された遺跡で、弥生時代前期から古墳時代前期にかけて長い間利用された集落である。多くの木製品が出土し、漆で作られて細かな彫刻が施された漆器も出土している。

興味深いことに、まるで小竹貝塚のように、青谷上寺地遺跡でも北陸、近畿、山陽地方の土器が見つかっており、ヒスイも出土しているので、遠方との交流があったと考えられる。また、排水溝から 109 体の人骨が見つかるが、低湿地帯であることから、骨の色も小竹貝塚出土人骨と同じ茶褐色系である。また、この遺跡出土の 3 個体分に脳が残っていた。それほど保存状態が良かったということである。

さらに、青谷上寺地遺跡出土の人骨には、人為的な損傷のあるものが多く見つかり、骨盤に銅の矢じりが刺さっているものなど約 100 点に人的損傷が見られる。これは恐らく集団戦闘か、もしくは、排水溝で見つかるという状況から、虐待の可能性も考えられる。縄文時代にはとは異なり、弥生時代は「戦争」があった可能性がある。

さらに、背骨が一塊になった症状も発見されている。これは脊椎カリエス、つまり結核によって生じた背骨の病変である。縄文時代に結核にかかった人骨は見つからない。ところが、弥生時代になると、こんなに明瞭に結核の痕跡を残す人が出てくるのである。これは日本最古の結核の例であり、大陸との人的交流があった証拠でもある。

4. 古墳時代以降の人骨の特徴

古墳時代人の顔貌は、弥生時代に似ている。関東の古墳時代の人骨は、平坦な顔つきで、下顎骨の幅が広い傾向にある。ただ、日本は酸性土壌であるため、古墳時代の骨は保存状態が非常に悪く、100～200 年の間にぼろぼろになって形を留めていないものがほとんどであるため、分析できる個体数が少なく、はっきり断言できるわけではない。また、四肢骨

から、古墳時代の人は弥生時代人と同じく高身長だったと考えられている。いわゆる渡来系の弥生時代人が日本全国に広がっていった可能性があるが、古墳時代にも大陸から渡来してきた可能性もある。

古墳時代人の形質には地域差が見られ、東北の古墳時代人は縄文時代人に似ており、北部九州の古墳時代人は弥生時代人に似ていることが指摘されている。北陸などの日本海側がどうなのかは長らく謎のままだったが、富山県高岡市頭川の古墳後期の横穴式古墳から、1985 年に約 30 体の遺体が発見された。これらの人骨は石灰岩で出来ている横穴に収納されていたため、非常に保存状態が良く、多数の頭骨が生前の形を保持した状態であった。これらを計測して主成分分析を行ったところ、頭川の平均値は関東縄文人と九州弥生人の間に位置し、少し九州弥生人に近い傾向が見られている。個体ごとに分析してみると、縄文的な顔つきをしている個体もいれば、九州弥生人にそっくりの顔つきをしている個体もいた。つまり、頭川古墳人骨には個体差がかなりある、と言える。考古遺物から言えるわけではないが、頭川古墳人骨の顔つきを見ると、他地域との交流が疑われる印象を受ける。

奈良・平安時代については、日本海沿岸はおろか、日本全国を見ても完全な人骨はほとんど発見されていない。平城京や平安京などの発掘でも、大腿骨 1 本など部分的な人骨は見つかっているが、完全な一体分の人骨が出土することは殆どない。その理由は長らく謎で、仏教の伝来により火葬されるようになったためという説が有力だったが、最近、奈良時代から鎌倉時代にかけて、日本人の庶民は風葬されたという説が提唱されている。

ただ、奈良・平安人の個性をうかがい知る遺体は存在する。それは中尊寺の藤原四代のミイラで、大変保存状態がいいと報告されている。奥州藤原氏以外で奈良・平安人の遺体が発見された遺跡として有名なものに、秋田県の沖合 20km にある飛島のテキ穴という洞窟がある。1964 年、地元の中学生在が平安時代の人骨を発見している。見つかった骨は男性と女性、約 22 個体分の中で、ほぼ完全に修復できた 2 個体の頭骨を見ると、男性は縄文時代人、女性は古墳時代人の特徴を有している。東北地方では縄文人の系譜が平安時代まで残っていたと推測されており、文献記録に残る「蝦夷（えみし）」というのが、奈良・平安から恐らく鎌倉時代までは日本海沿岸にも生き残っていて、それを東ねていたのが藤原四代だったと言えるかもしれない。

鎌倉時代の人骨は約 5000 体、室町時代の人骨は約 1000 体ほど見つかったが、日本海側ではほとんど見つかっておらず、見つかったもぼろぼろで形を分析することが出来ないケースが殆どである。

5. 江戸時代人骨の特徴

江戸時代の人骨は日本各地でこれまで 2 万體以上見つかった。江戸時代人骨に関しては多くの興味深い形が報告されている。例えば親知らず、つまり第三大臼歯が生えてこない個体が多くなるのが江戸時代と言われている。

また、江戸時代人の平均身長は男性で 156cm、女性で 145cm と、日本史上最も小柄であったと言われている。

現在、東京都では各所で都市開発が行われており、それとともに江戸時代の江戸の遺跡がよく見つっている。これらの遺跡から人骨が発見されるケースもよくある。江戸という都市にはお寺が多く、死者はお寺で土葬されていたからである。また、江戸は湿地帯だ

ったので、人骨の破損が少なく、大変良好な保存状態で出土することも関係している。

例えば上野の不忍池近くの池之端七軒町遺跡では約 700 体の土葬の遺体が見つかったり、新宿区などでは約 1400 個体の遺体が見つかった遺跡もある。こういった遺跡から出土するのは下級武士を含む庶民であるが、増上寺や寛永寺にある将軍家や旗本階級の墓の調査も行われている。

江戸時代人の頭骨を分析したところ、武家は逆三角形に近い顔をしており、町人はどちらかという四角形の顔付きをし、明らかに武家と町人では顔つきが違っていたことが明らかになっている。特に将軍や大名では顔が極めて細く長い「面長」な風貌を持ち、まるで浮世絵の「美人画」などで表現される顔のように見える。これらの階級差がなぜ生じたのかは明らかになっていないが、恐らく生活環境に強く影響されたのだろう。

ちなみに、日本海側では江戸時代の骨は幾つかの遺跡で出土しているが、保存状態や個体数は江戸の江戸時代人と比べれば非常に少ない。ここで紹介する人骨は福井県の消防署工事のときに見つかった人骨である。この人骨は興味深いことに、小竹貝塚や青谷上寺地遺跡で出土した人骨と同様に、茶褐色系の色調を示し、非常に保存状態が良好であった。遺体は全部で 7 個体分あったが、江戸から出土した人骨の主成分分析の階級で見ると、江戸の町人が分布する領域の端っこに位置する。しかも、個体間の距離が大きいことから、これらの頭骨も個体差が大きかったことが言える。

以上、日本海沿岸で出土した人骨のつまみ食いのような説明をしてきたが、大雑把に「日本海沿岸で出土する人骨には遺跡内での多様性が見られる傾向があり、他地域との人的交流がよくあった可能性がある」と言えるかもしれない。もちろん、任意に選んだ数少ない遺跡での話であるので、あくまで想像の域を超えない。ただ、今後、遺跡や人骨が発見されていけば、日本海沿岸に生きていた人達の実像が明らかになっていくし、いままで知られていなかった興味深い新事実も明らかになる可能性もある。もし本日のつたない講義で、「人骨が語る情報の豊かさ」と「怖いだけではない人骨の面白さ」を感じて頂ければ、演者としてこれほどうれしいことはない。



図 日本人の時代変化